

東院地区の調査

— 第421・423次

1 はじめに

平城宮にはほぼ正方形をした宮域の主体部分の東側に張り出し部分が設けられており、この部分の南半を東院地区と呼んでいる。東院地区は皇太子の居所である東宮があったと推定できる場所で、『続日本紀』など文献史料の記述によれば叙位などの儀式や宴会などに頻繁に利用されていたことが知られる。また神護景雲元年(767)の竣工と記される「東院玉殿」や宝亀年間(770~780)の記録にみえる「楊梅宮」は東院にあったと考えられている。

東院地区ではこれまで南辺部および西辺部を中心に発掘調査が実施されており、復原整備された庭園(東院庭園)の他、多くの掘立柱建物が建ち並び、かつ何度も建て替えられていた様子が確認されている。しかし「東院玉殿」に相当するような東院の中枢をなす建物の遺構は現在までのところ確認されておらず、東院地区の性格を探究していく上では、中枢部分の解明が不可欠な課題として残されてきた。

当研究所では2006年度から5カ年の計画で東院地区の重点的な調査を予定しており、本年度はその2年目にあたる。上記のような既往の調査成果で浮かび上がった課題を踏まえ、今年度は東院地区の中心に近いと推定される南北中軸線上(建部門心上)の一画に第421次調査区(1560㎡)を、巨大な総柱建物群を検出した第292次調査(1998年度)および第381次調査(2004年度)の調査区の東側に第423次調査区(1350㎡)を設定した(図152)。調査期間は第421次調査が2007年4月2日から10月10日まで、第423次調査が2007年9月25日から2008年3月3日までである。

2 周辺の調査成果

第421次では調査区の西側を第401次調査(2006年度)の調査区と370㎡程度重複させている。また第423次調査でも調査区の西側を第292次調査および第381次調査の調査区と、南側を第401次調査の調査区とあわせて420㎡程度重複させている。このように広い重複部分を設定したのは、前述したように東院地区では掘立柱穴が高い密度で

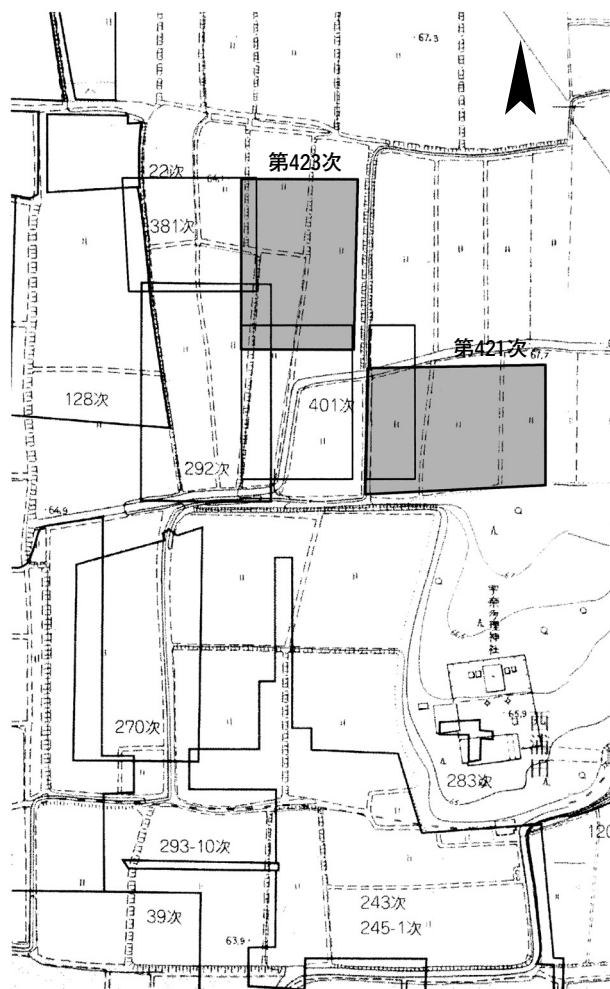


図152 第421次・第423次調査区位置図 1:2000

検出されていることから、周辺の調査成果を含めた検出遺構の検討をすることが遺構の変遷を考察するうえで極めて重要となるからである。

第292次調査および第381次調査では総柱建物を主体とした区画が奈良時代を通じて存続し、徐々に施設を拡充していく様子が把握された。また第401次調査では、奈良時代の前半と後半で東院地区中央部と西辺を限る区画施設が大きく変化し、奈良時代後半になって東院地区の西辺と中心部が明確に区別され、このうち西辺が巨大な総柱建物を中心とした区画として整備されたことが明らかとなった。建物の規模や密度から判断して、これら東院地区の西辺に建ち並ぶ建物群が東院の中でも重要な施設であったことは疑いないが、その性格を確定しうる調査成果は得られておらず、東院地区の施設配置と機能を比定する上で中枢部分の調査の必要性がさらに高まった。

(金井 健／文化財保存修復研究国際センター)

3 第421次調査

調査地の地形と基本層序

地 形 調査地は、平城宮跡内に認められる北から南に張り出す3つの支丘のうち、もっとも東の支丘の末端に位置する。西方には北へ入りこむ支谷があり、調査地のある支丘から、南および西へ緩やかな傾斜面となっている。支丘の基盤層は、黄褐色(2.5YR4/6)砂礫粘質土であるが、この基盤層は上層ほど風化が進んでおり、明確な面として認識することは困難ながら、砂礫粘質土の上には黄褐色(2.5YR4/3)砂質土が広く堆積する。

基本層序 支丘の平坦面に位置する調査区東半と、緩斜面にあたる西半では、基本層序が異なる。調査区西半は、現地表面の表土、中近世から近代までの耕作土を除去すると、40cm程度で上層の整地土(褐色(10YR4/4)砂質土。以下、整地土B)にいたる。ただ、整地土Bは後世の削平により調査区の西端に最大5m程度の範囲に確認できるのみである。整地土Bの下層には、もう1層の整地土(にぶい褐色から褐色(7.5YR5/4～7.5YR4/3)粘質土。以下、整地土A)が認められる。整地土Aは、調査区の西半全域に広く残る。さらにその下層には、土器や炭の微細破片を多く含み、奈良時代以前の旧生活面にかかわる暗褐色(7.5YR3/4)粘質土が分布し、その下には基盤層の一部の黄褐色(2.5YR4/3)砂質土が認められる。

調査区東半は、現地表面の表土、中近世から近代までの耕作土を除去すると、20～30cmでにぶい黄褐色(10YR5/4)粘土層にいたる。にぶい黄褐色粘土層には遺物はほとんど認められず、いわゆる地山にあたる。

また、調査区西半のうち南端約5mには、整地土Aないしいわゆる地山の上に、褐色～灰褐色(7.5YR4/4～7.5YR4/2)粘質土層の整地土(以下、整地土C)が存在する。整地土Cは、南の調査区外に続き、南ほど厚くなるが、調査区西南隅には認められない。

なお、調査区の東北隅から南端のほぼ中央にかけて、北東から南南西方向に、最大幅約2mの範囲の砂質土が帯状に認められる。埋土に顕著な遺物は含まれないが、平城宮造営以前の自然流路に由来する堆積層と考えられ、調査地の旧地形を復元する上で注目されよう。

遺構検出は、調査区西半では整地土A面・整地土B面ないし整地土C面で、東半ではいわゆる地山上面でおこ

なった。

遺構の概要 今回の調査で検出した遺構は、建物、塀、溝などである。礎石建物と推定する建物は3棟確認した。以下、遺構の重複関係、建物配置、出土遺物などから検出遺構を5時期に区分し、遺構の概要を略述する。ここでは、調査所見の事実記載を旨とし、第423次調査や既調査も含めた全体の遺構配置や遺構変遷などは、後節の検討に委ねる。

I 期以前の遺構

SX18930 調査区南端で検出した溝状土坑。東西約27m、南北約3mにおよぶ。第401次調査では、掘込地業と考えた遺構である。調査区内で検出されたすべての遺構に先行しており、その掘削がI期の建物の造営以前にさかのぼることは確実であるが、それを工程差とみるべきかI期以前と位置づけるべきか断案をもたない。検出した溝状土坑の4箇所では断割調査を実施したが、流水の痕跡は認めがたく、埋土の状況は人為的に一気に埋め戻されたとみられる(図154)。

SD19074 南北4.5m分を検出し、さらに南北へ続くと推測される。北側は整地土Aに覆われており、I期以前にさかのぼる溝であることは確実である。

I 期

SA19025 10間分検出した掘立柱の南北塀。調査区外南北にさらに延びると推測される。柱間寸法は10尺等間。調査区の東方に推定される、東院東半部の区画の西を限る塀であろう。IV期のSB19049の柱穴より古い。

SA19055 9間分検出した掘立柱の南北塀。調査区外北にさらに延びると推測される。柱間寸法は10尺等間。第292次調査で検出したSA17802に対応する、東院西半部の区画の東を限る塀であろう。調査区南端で、SB19056にとりつく。Ⅲ期のSB19090の柱穴より古い。

SB19056 南北方向に柱間1間分検出した。南北塀SA19055と柱筋を揃えるが、残存状況からこの2穴は礎石の据付穴・抜取穴と判断した。柱間が約12尺とやや広いことを考慮すると、掘立柱塀にとりつく礎石建ちの門の可能性はある。SA19025とSA19055との間に推定する南北道路に開く門と考える。

SA19067 4間分検出した掘立柱の東西塀。柱間寸法は10尺等間。第292次調査で検出したSA17803と柱筋を揃える。

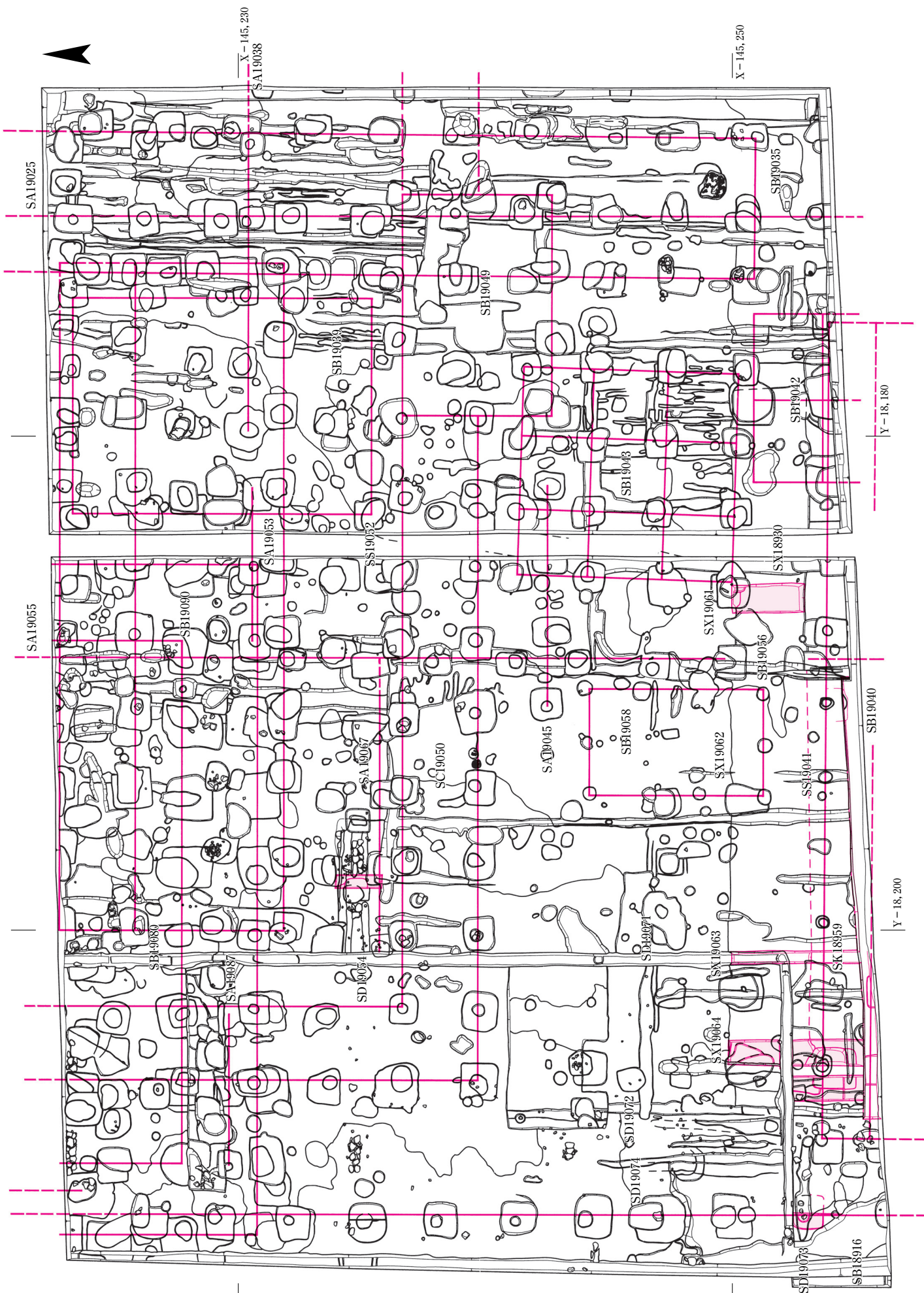


図153 第421次調査遺構平面図 1:200

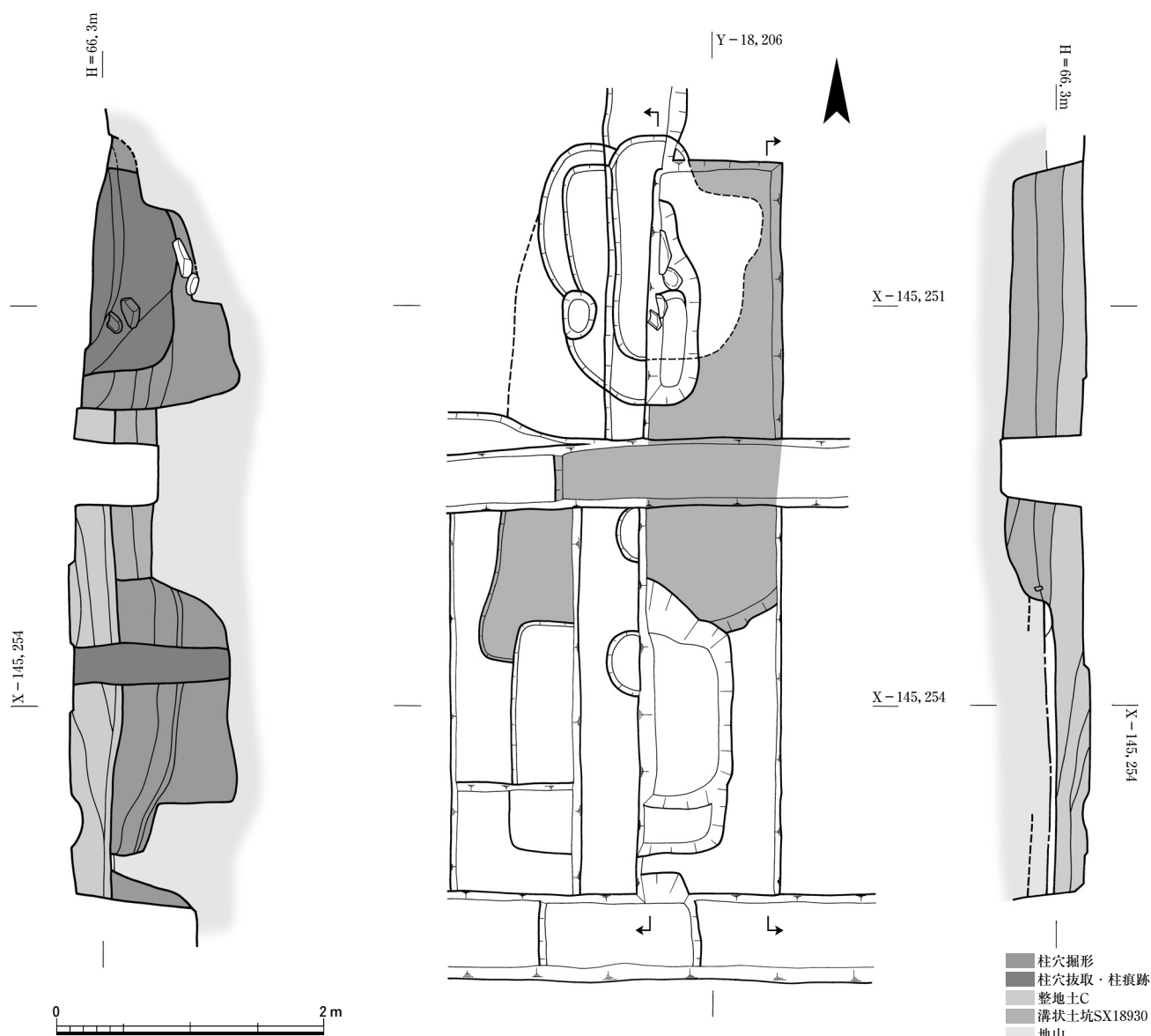


図154 SB19040の柱穴と溝状土坑SX18930 1:50

SA19087 2間分検出した掘立柱の東西塀。柱間寸法は10尺等間。第292次調査で検出したSA17801と柱筋を揃える。

Ⅱ 期

SB19035 桁行9間以上、梁行2間の南北棟建物。柱間寸法は10尺等間。調査区外北へさらに延びる。根石とみられる石が残るものもあり、礎石建物であろう（図155）。
SB19040 桁行11間、梁行1間以上の掘立柱の東西棟建物。柱間寸法は、桁行方向は10尺等間。調査区外南へさらに延びる。東西方向に2列の柱列を確認した（うち南側の柱列は西端から2穴分を除き南壁の断面のみで検出した）。梁行方向は8尺～9尺とやや狭く、東西棟建物の北面底部分に相当すると考えられる。

この建物は、掘形を掘り、柱を立てた後に整地土Cを

盛って床面を整地する工法をとるため、整地土の残る範囲、すなわち西2本目～7本目の柱は、柱痕跡ないし抜取穴が検出されるのみで、整地土C面からは掘形は検出できない。掘形は、整地土Cの残存しない東側の範囲、もしくは、断割トレンチ、排水溝底で検出した（図154）。

SS19041 SB19040の北側にて、東西方向に断続的に5基検出した柱穴列。柱間寸法は一定しないが、いずれもSB19040の柱の間に配置されることから、造営ないし解体にともなう足場穴列と推測される。

SB19043 東西3間、南北3間の総柱建物。柱間寸法は10尺等間。柱穴の残存状況から掘立柱建物である。

以上の3棟は、いずれも造営方位が西で北に振れる特徴をもち、同一の造営計画によるⅡ期の建物と考えられる。

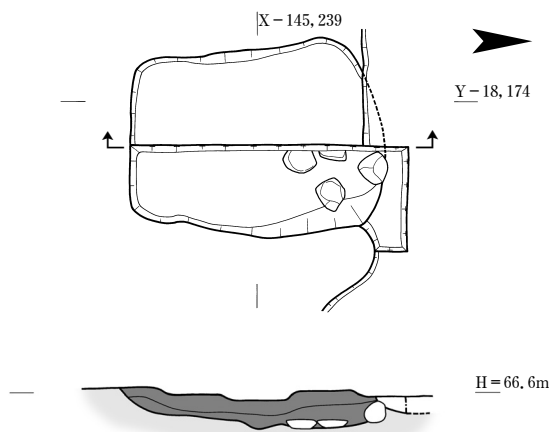


図155 SB19035の柱穴 1:50



図158 SB19035の柱穴（北東から）

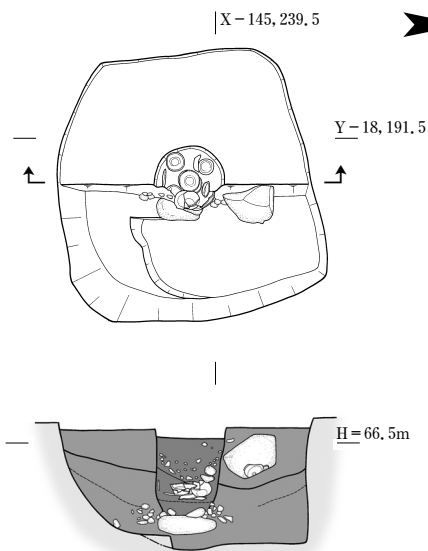


図156 SC19050の柱穴 1:50

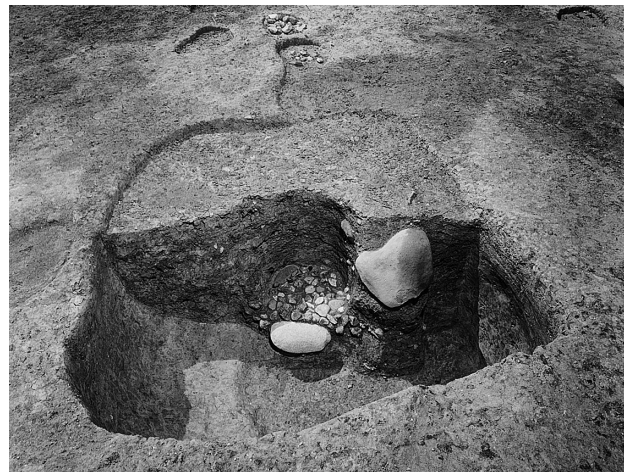


図159 SC19050の柱穴（東から）

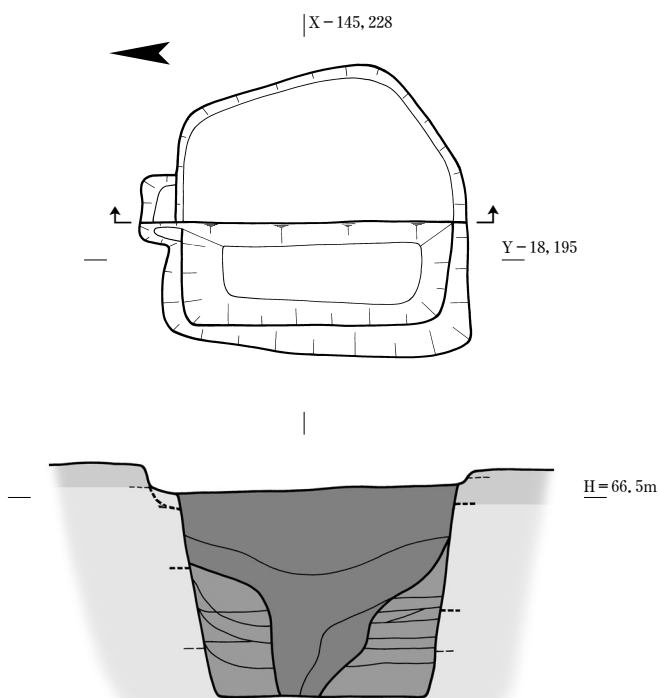


図157 SB19080の柱穴 1:50

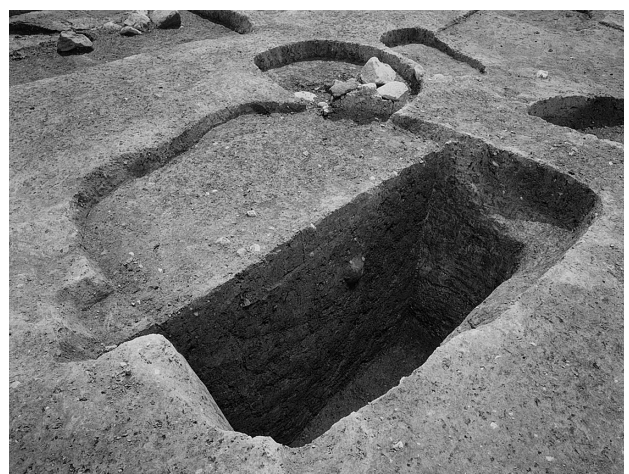


図160 SB19080の柱穴（北西から）

■ 柱穴掘形
■ 柱穴抜取・柱痕跡
■ 整地土B
■ 地山

Ⅲ 期

SB19080 桁行9間、梁行4間の四面庇をもつ掘立柱の東西棟建物。柱間寸法は10尺等間。柱穴の掘形は、1辺1.5～2m、深さ約1.5mと大規模である(図157)。

SA19038 東西4間分以上検出した掘立柱の東西塀。柱間寸法は10尺等間。調査区外東へ延びる可能性がある。SB19080とほぼ柱筋を揃え、Ⅱ期のSB19035・時期不詳のSB19039より新しく、Ⅴ期のSB19090より古いことから、Ⅲ期に属すると考えた。

Ⅳ 期

SB19049 桁行3間、梁行2間の掘立柱の東西棟建物。後述する掘立柱回廊(SC19050)がとりつく。

SC19050 東西9間、南北5間分検出した。柱間はいずれも10尺で割り付けられ、第401次調査でSB18925とした建物の柱穴と一連の建物を構成すると理解すれば、東西・南北とも9間以上の長い建物で、この時期の東院中枢部を囲む、単廊形式の掘立柱回廊の西南隅となる可能性が高い。なお、SB19049以东では連続する柱穴を検出できなかったが、柱間をやや広くして調査区外に柱穴が続くか、あるいは削平により失われた可能性を考える。Ⅲ期のSB19080より新しく、Ⅴ期のSB19090より古い。

SC19050の柱掘形は、1辺約1.8m、深さ約90cmの隅丸方形で、柱痕跡を残すものが多い。このうち、図156に示した柱穴の柱痕跡には、ほぼ完形に復原できる14個体分の土師器が廃棄されたものがあり特筆される。

この柱穴の掘形埋土は、いわゆる地山に由来するにぶい褐色(7.5YR5/3)の粘土ブロックを含む粘質土で、上部に長径40cm程度の安山岩巨礫を含んでいる。掘形の中央部下底付近(検出面から約75cm下)には扁平な巨礫を並べて礎盤石とし、その上位に拳大未満のチャート垂角礫を敷きつめている(厚さ8～10cm)。柱痕跡は直径約45cmの円形プランをもつ。14点の土師器は、柱痕跡の下底付近に埋まっていた。なお、柱痕跡の埋土は暗褐色を呈し、拳大未満の礫を多く含む。かかる遺物の出土状況は、建物存続中にすでに柱の地中部分が根腐りし、空洞が生じていた可能性を示唆する。

SS19051・19052 掘立柱回廊(SC19050)の南北とSB19049の北側にて、東西方向に南で7基、北で6基検出した柱穴列。柱間寸法は一定しないが、いずれもSC19050の柱の間に配置されることから、SC19050の造営ないし

解体にともなう足場穴列と推測される。

SB19053 2間分検出した掘立柱の東西塀。SC19050と柱筋を揃え、北20尺に位置する。Ⅲ期のSB19090より新しく、Ⅴ期のSB19080より古い。

SD19054 約5m分検出した東西溝。一部底石が残るほか側石・底石の抜取痕跡を検出しており、石組溝と推測される。SC19050の北雨落溝の可能性はある。SX19068より古く、SA19069より新しい。第401次調査で検出したSD18928と一連の石組溝であろう。

Ⅴ 期

SB19090 桁行9間、梁行3間分検出した掘立柱の東西棟建物。北庇をもつ。柱間寸法は10尺等間。身舎の西から6間分には、東柱と思われる柱が認められることから、一部床張りの可能性がある。建物の中軸は、東院南門(推定建部門)の東西方向の中軸線上で、かつ門の北およそ500尺に位置するなど、東院の建物群の配置計画を探る上で重要と思われる。

SA19045 3間分検出した掘立柱の東西塀。SB19090と柱筋を揃え、南35尺に位置する。

時期不詳の遺構

SB19042 調査区南端で検出した、東西2間、南北1間以上の総柱建物。さらに調査区外南へ延びる。残存する柱穴は著しく浅く、とくに北側列西側の2穴は平面では明証を欠くものの、南壁断面で明瞭な柱穴を確認している。礎石建物であろう。Ⅱ期のSB19040より新しい。

SB19039 桁行4間、梁行3間の掘立柱の南北棟建物。柱間寸法は10尺等間。Ⅱ期のSB19035、Ⅲ期のSB19057より古い。

SB19058 桁行3間、梁行2間の掘立柱の南北棟建物。柱間寸法は7尺等間。すべての建物より新しい。

SX19061 長径約2.1m、短径約1.5mの不整形土坑。SX18930より新しい。

SX19062 長径約1.8m、短径約1.2mの不整形土坑。Ⅱ期に属する整地土Cより新しい。

SX19063・19064 ともに1辺約1.6mの掘形と長径約1.8mの不整形の抜取穴をもつ柱穴。掘形・抜取穴ともⅡ期に属する整地土Cより新しく、それ以後に降る遺構であるが、ほかに組み合うものがなく性格も含め不詳。

SD19071 SX18930の北約6mにある東西溝。東西約6m、幅約60cm分検出した。第401次調査区にのみ認めら

れ、それより東では後世の耕作溝と重複し確認できない。
SD19072 SX18930の西約1.5mにある南北溝。SD19073
に接続し、L字形の溝を構成する。南北約6m、幅約60cm
分検出した。南側では後世の耕作溝と重複するため確認
できない。

SD19073 SD19072と接続し、L字形の溝を構成する東西
溝。東西約4.5m、幅約60cm分検出した。時期不詳の南北
棟建物SB18916と重複関係があり、溝が建物より新しい。
なお、SD19071～19073の3条の溝の埋土には、いず
れも凝灰岩の細片が多く含まれており、一連の溝である
可能性が高い。

SB18916 第401次調査で桁行12間以上、梁行2間検出
した掘立柱の南北棟建物。今回の調査で南にさらに2穴を
検出したが、妻柱にあたる位置に柱穴は存在しないこと
から、さらに南へ続くと考えられる。Ⅲ期のSB19090よ
り新しく、時期不詳のSD19073より古い。第401次調査の
知見によると、Ⅳ期のSD18927との重複関係を根拠にそ
れ以前（第401次調査ではⅢ期）と推定したものの、当該地
区の全体的な遺構配置との関連から1時期を構成するに
は建物が不足する。また上記の重複関係の知見を改めⅤ
期の建物とすると、建物配置が複雑でまとまりを欠く。
現状では、時期不詳として、後考に俟ちたい。

（山本 崇）

出土遺物

土器 第421次調査では整理箱12箱分の土器が出土した
が、その多くは細片であり、遺構出土のものは少ない。
SK18959から須恵器甕の胴部片が出土したほか、いくつ
かの建物柱穴で須恵器杯・同蓋の破片などがわずかに出
土した程度である。円筒埴輪片・古墳時代の土師器片が
調査区の随所から満遍なく出土しているが、これらはも
とより遊離資料であり、風化・細片化が進んでいる。

そうしたなか、Ⅳ期掘立柱回廊（SC19050）の柱痕跡の
一つから土師器碗A、土師器ⅢCがそれぞれ7個体出土
したことは特筆すべきであろう。これらの土器は柱痕跡
の下部から、廃棄時の原位置を保って出土したものであ
る。出土状態は正位のほか、抜取穴の壁際で傾斜・倒立
しているものも認められ、その配置は必ずしも規則的で
ない（図156）が、伏せた状態（逆位）のものは確認されな
かった。これら土師器の配置には、明確な規則性を認め
ることができず、おそらく、柱痕跡の穴に捨て込んだ状

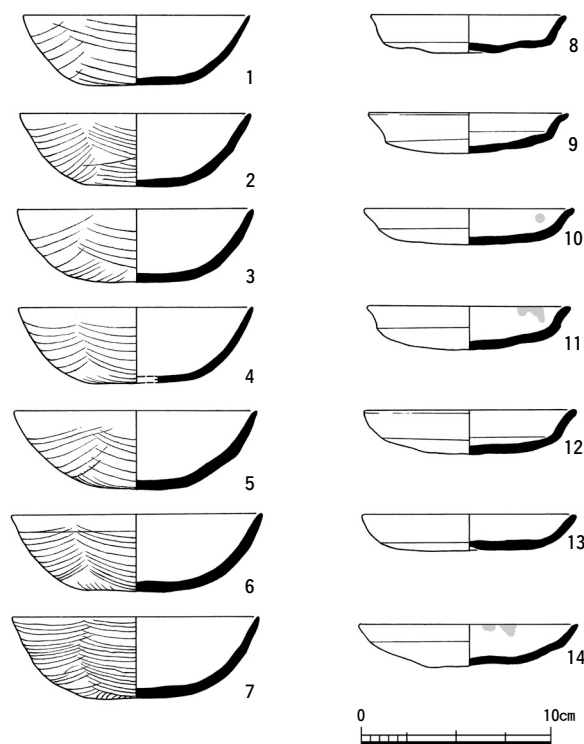


図161 SC19050の柱穴柱痕跡出土土器 1:4

態を示しているのであろう。

碗・Ⅲはいずれもほぼ完形であるが、器表面の剥落が
目立つなど遺存状態は悪い。碗Aは口径12.0～13.2cm、
器高3.7～4.3cmで、すべてC3手法である。外面のヘラ
ミガキは個体により精粗があるように見えるが、これは
遺存状態を反映したものかもしれない。図161-1～4は
口径がやや小さいグループで、ヘラミガキが比較的粗く
見えるもの。5～7は1～4に比し、口径がわずかに大
きいグループで、ことに7はヘラミガキが密である。平
城宮Ⅳ～Ⅴに属する。

ⅢCは口径10.3～11.5cm、器高1.9～2.4cmで、ヨコナ
デにより口縁部が屈曲するもの4例（図161-8～11）、口縁
部が内彎するもの3例（12～14）である。いずれも器表面
の風化・剥落が進んでいるが、底部は不調整でユビオサ
エの凹凸を残すものが多い。なお、灯明Ⅲとして使用し
た痕跡を残すものが4例（9・10・11・14）認められる。

これらの土師器は碗・Ⅲが7個体ずつとまったく同数
であり、7組の碗・Ⅲを何らかのセットとして用いてい
たことを想起させる。また、柱抜取穴からまとまって出
土したことから、Ⅳ期建物の解体時に廃棄されたものと
考えられる。

（森川 実）

瓦磚類 今回の調査で出土した瓦磚類の一覧が表20である。このうち、比較的状态の良い軒瓦の拓本を図162に掲げた。軒瓦の出土点数はさほど多くないが、いくつか注目すべき点がみられる。

まず指摘できるのが、出土した瓦の多くが養老5年(721)から天平17年(745)までに製作されている点である。これを遡る瓦が今回は確認されておらず、周辺の調査区でも類似した状況が指摘できることから、この時期に東院の整備が進められたことがうかがわれる。

この時期の瓦の中には、6311A-6664Fや6313A・B-6685Bなど、内裏で多く見られる軒瓦のセットが確認されており、東院地区の整備が内裏の整備と軌を一にしている状況がうかがわれる。このうち、6313A・B-6685Bは小型の軒瓦のセットであることから、薨棟を用いた檜皮葺建物が存在したのであろう。

一方、還都後に属する軒瓦は極めて少ない。特に、還都直後の平城宮大改造の時期の瓦(6663Cなど)はわずかに認められるだけである。その後も繰り返される建物群の建て替えにともなって散逸した結果であろうか。

この他に、「東院玉殿」所用とされる6151Aが1点出土している。この個体は施釉されていない。

なお、近隣の調査区(第401次調査区など)では緑釉磚の出土が顕著であったが、今回の調査区では1点も確認で

きなかった。緑釉磚の使用に関して分布に差違が見られる点は興味深い。

最後に、遺構との関係について触れておきたい。SB19035の抜取痕からは6311Aと6663Cが出土しており、その解体が平城還都後におこなわれたことを示唆している。また、SB19090の抜取穴から6151Aが出土しており、建物の時期を考える上で重要である。(林 正憲)

表20 第421次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6135	A	1	6663	A	3
6151	A	1		C	1
6225	?	1		?	4
6282	I	1	6664	F	1
6307	A	1	6681	E	1
6311	A	2	6682	?	1
6313	A	1	6685	B	3
	B	1		?	1
	?	1	6721	C	2
巴(中世)		1	6767	A	1
刻印付き軒丸		1	型式不明(奈良)		2
型式不明(奈良)		2	型式不明		1
型式不明		8			
軒丸瓦計		22	軒平瓦計		21
丸瓦			平瓦		
重量	89,22kg		重量	16,44kg	
点数	819		重量	55,36kg	
			点数	13	
				51	
道具瓦					
面戸瓦		1点	切廻斗瓦		1点

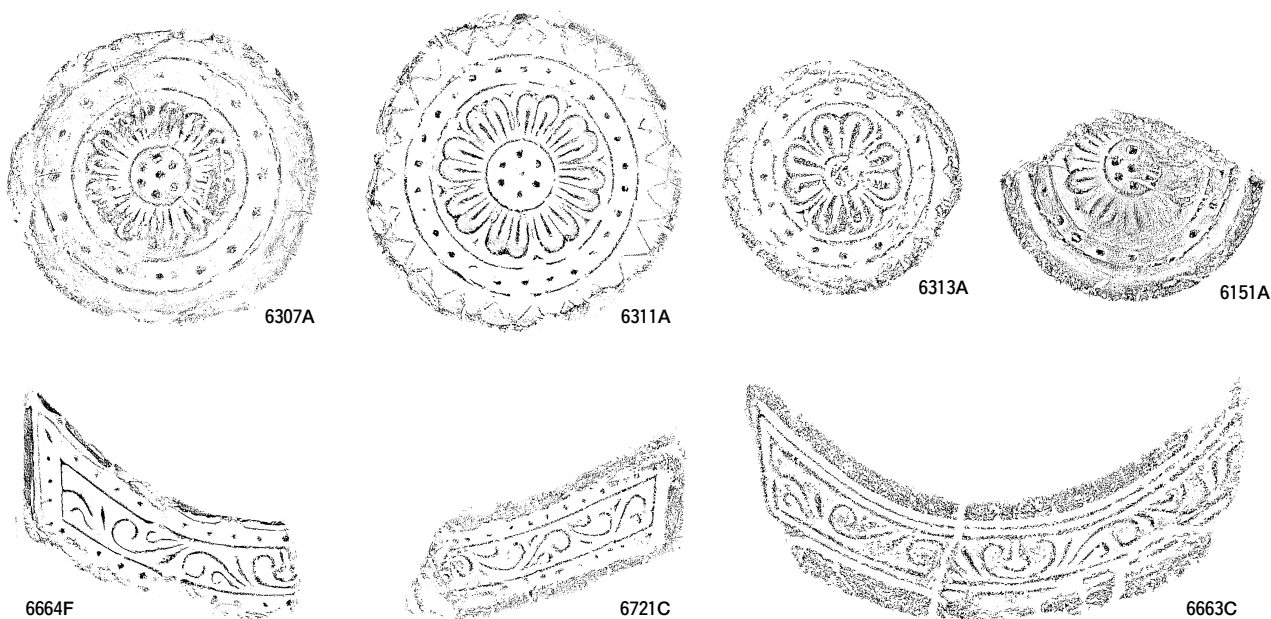


図162 第421次調査出土軒瓦 1:4

4 第423次調査

基本層序

本調査区は南北に通る水田畦畔によって分かれており、西半より東半が高く、東西で奈良時代の遺構検出面が異なる。遺構検出面は東から西に約45cm傾斜し、北から南には0～20cmほど傾斜する。西半は表土・耕土・床土の下（地表下35～40cm）に、遺構検出面である黄褐色粘質土（奈良時代の地山）がある。東半は表土・耕土・床土の下に、にぶい黄褐色砂質土（遺構検出面、地表下20～40cm）、暗褐色粘質土（地表下50～60cm、奈良時代の地山）・黄褐色粘質土の順に存在する。このうち調査区東端部分（後述の土坑SK19119より東）は遺構検出面であるにぶい黄褐色砂質土の下に20～30cmの厚さで褐色土がある。この褐色土は古墳時代や7世紀の土器および旧石器などを含んでおり、平城宮造営時の整地土と考えられる。

検出遺構

掘立柱建物13棟、石組溝8条、礎敷などを検出した（図164）。遺構の重複関係、出土遺物および建物配置から大きく5時期にわけられる。

I 期

SB17840 調査区南部の東西棟建物で、第292・401次調査で一部を確認していた。桁行7間、梁行2間の身舎で南北両面に廂を付ける東西棟建物。身舎と北廂間が約3m（10尺）で、南廂は約2.1m（7尺）と短い。建物東北部では、掘形掘削面の上に約10cmほどの赤褐色土を積んでおり、その赤褐色土上に検出される石を据えた穴は床束の可能性が高い。

SB18756 調査区西端で検出した、第381次調査（2004年度）で堀（SA18756）としていた柱穴列を西側柱とする梁行2間の南北棟総柱建物。桁行は9間以上で調査区より北に延びる。柱間寸法は約3m（10尺）。柱穴間中央の小穴列は足場穴列と考えられる。柱抜取穴から軒平瓦6721Ga型式（Ⅱ－2期）出土。

Ⅱ 期

SB11900・19101・19102は南北に柱筋がそろうので同時期とした。石組溝SD19103がSB19100の床下を通るものの、石組溝SD19104がSB19100の西側を併走していることから、一連の石組溝とSB19100は同時期と考えられる。SB19100の西側には礎敷がみられる。

SB19100 調査区東端で検出した桁行9間・梁行2間以上の総柱建物。東は調査区外に延びる可能性がある。柱間寸法は約3m（10尺）だが、最も南の柱間のみ2.4m（8尺）と狭い。

なお、柱抜取穴から半円形の抉込みをもつ凝灰岩切石が出土した。長辺35cm、短辺34cm、厚さ10cm。柱の下端を化粧したもの、柱根巻石もしくは壁地覆石と考えられる。柱直径は推計で16cm。

SB19101 SB19100の北方にある桁行3間以上の建物。SB19100と2間分離れる。柱間寸法は約3m（10尺）。SB19100とともに東に延びる大型建物の一部であると考えられる。

SB19102 SB19100の南方にある建物。柱間寸法は約3m（10尺）。西側柱列のみ検出した。柱抜取穴が長大で、埋土に炭化物と軒瓦の大型片が入るのが特徴である。柱列の2m西側を通る石組溝SD18906（後述）は本建物の雨落溝の可能性ある。柱抜取穴から軒丸瓦6225A型式（平城還都前）、6308Aa型式（Ⅱ－2期）出土。

SD19103 調査区南部で検出した東西方向の石組溝。約



図163 石組溝SD19103と下層の溝（西から）

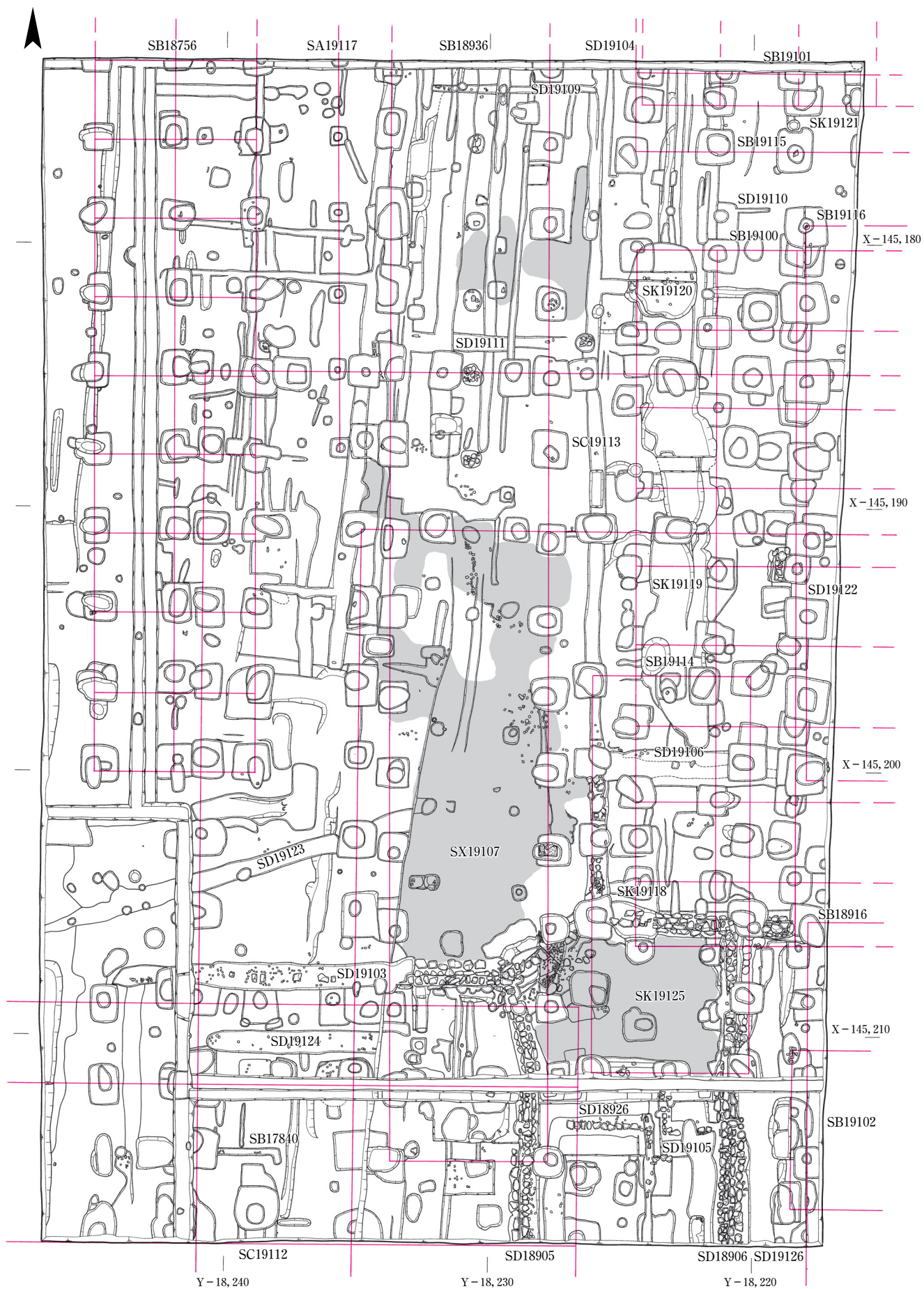


図164 第423次調査遺構平面図 1:200

30m分を検出した。東から西へ流れる。まず真東に8m流れ、石組溝SD19104との接続点から南西に7m斜行し、さらに石組溝SD18905との接続点から真西に流れる。幅は30～40cm。深さ約15cm。底には一辺20～30cmの石を2列並べ、間に小石を詰めており（以下に掲げる石組溝も同じく間に小石を詰める）、側石の外側にその天端の高さにあわせて平たい敷石を置く。石材の多くは三笠山産安山岩で、少数の花崗岩を含む。間に詰まれた小石はほとんどがチャートである（石材の鑑定は保存修復科学研究所の肥塚隆保・高妻洋成、国際遺跡研究室の脇谷草一郎による）。側石の抜取穴から軒丸瓦6132A型式（Ⅲ-1期）が出土した。埋土の灰色砂および側石抜取穴から奈良時代中頃の土器が出土している。なお、底石の下に凝灰岩切石（長さ約17cm、幅約15cm、高さ約20cm）が並んでいること、また上層の石組溝の側石の一部に凝灰岩を使用していることから、同じ位置に先行する溝があったと考えられる（図163）。下層の溝の底石は確認できなかった。

SD18906 調査区南東部で石組溝SD19103と接続する南北方向の石組溝。第401次調査とあわせて約12m分検出



図165 石組溝SD19103と磔敷SX19107（西から）

した。幅約40cm、深さ約15cm。底には一辺20～30cmの石を2列に並べる。第401次調査では二時期の溝と報告したが、溝の外側に平たい石を配する点でSD19103と同様の構造であることから、一時期の溝であると考えられる（後述のSD18905も同じ構造）。南から北に流れる。石組溝SD19103との接続点の側石は、石組溝SD19103とSD18906の両方の側石を兼ねている。また、SB19102の西雨落溝として機能したと考えられる。

SD19104 SD19103の屈折点に流れ込む南北方向の溝で、はじめは素掘溝であるが、石組溝SD19106の合流点から石組溝となる。石組溝は5m検出した。側石・底石の大半が抜き取られているが、一部に凝灰岩が使われている。幅約30cm、深さ約15cm。一辺約20cmの底石を1列敷く。北から南に流れ、石組溝SD19103に合流する。西側柱列がSB19100と1m離れて併走しており、西雨落溝として機能したと考えられる。

SD18905 調査区南中央部で石組溝SD19103から分岐する南北方向の石組溝。流れは北から南。第401次調査（2006年度）とあわせて約18mを確認した。石組溝SD18906と同じ構造であることから一時期の溝と考えられる。幅約30cm、深さ15cm。底には一辺20～30cmの石を1列に敷く。

SD19105 調査区の南東部で検出した石組溝で底石のみが残る。石組溝SD18906から西に分岐し、長さ2mで北へ折れ曲がり、長さ2mでさらに西折するようである。溝幅約25cm。底石は約20cm大のものを1列並べる。

SD19106 調査区中央で石組溝SD19104に合流する東西方向の石組溝。約12mにわたり検出。部分的に底石のみ残り、側石は抜き取られている。底石を2列に並べている。

SX19107A SB19100の西、Ⅲ期の回廊SC19112の東で、石組溝SD19103の北に残る磔敷。建物外部の舗装と考えられる。南半を中心に上下2層に分かれることが確認できる。上層の磔は大きめの石（直径5～10cm）、下層には小きめの石（直径2～3cm）を敷きつめている。上層はⅢ期の段階で、建物（後述のSC19112・SC19113・SB19114）の外について敷き加えたものと見られる。

SK19125 西をSD18905、北をSD19103、東をSD18906に囲まれた、磔が入れられた土坑。磔の厚さは20～30cm。南限ははっきりしないが、第401次調査区で検出した東

西溝SD18927まで礫の広がり確認できる。

SD19109 SD19108から分岐し西に流れる東西方向の素掘溝。幅約20cm。

SD19110 西に流れる東西方向の素掘溝。SD19108につながる。幅20～40cm。

SD19111 調査区北中央部を西に流れる東西方向の素掘溝。SD19108から分岐。幅40～50cm。

SK19118 調査区南東部で検出した土坑。南北1m、東西1.4m。SD19103の側石抜取と考えられる。奈良時代中頃の土器、軒丸瓦6282G・6282H型式（いずれもⅢ-1期）、軒平瓦6721Ga型式（Ⅱ-2期）出土。

Ⅲ 期

SC19112 第401次調査で二時期の塀（東がⅢ期として検出したSA18915、西がⅣ期として検出したSA17825）としていたが、今回の調査で北端に妻柱が見つかったことで一つの建物であると判明した。桁行21間（63m）以上、梁行2間の南北棟建物。第401次調査区よりも南に続く。柱間寸法は約3m（10尺）。二つの西側柱の抜取穴底に三笠山産安山岩の礎盤石が見られる。

SC19113 桁行5間以上、梁行2間の東西棟建物。柱間寸法は約3m（10尺）。東端は調査区外に延びる。これらの建物については一旦長廊状の建物と認識したが、追加調査の結果、一部で柱穴でないことが分かり回廊と認識を変更した。

SB19114 桁行5間、梁行2間の南北棟建物。柱間寸法は約3m（10尺）。南妻柱には礎盤に使用した磚があった。抜取穴から軒丸瓦6308A型式（Ⅱ-2期）、6291A型式

（Ⅱ-2期）・6311B型式（Ⅱ-1期）・6151A型式（Ⅳ-2期）、軒平瓦6663A型式（Ⅱ-2期）出土。なお、後述のSK19119と重複する柱穴の抜取穴から6151A型式が出土しているが、混入の可能性を検討したい。

SX19107B Ⅱ期の礫敷SX19107Bの項を参照。

Ⅳ 期

SB19115 東西3間以上の建物。四面廂付建物か総柱建物の一部である可能性がある。柱間寸法は約3m（10尺）。柱穴の一つに三笠山産安山岩の礎盤石があった。柱抜取穴から軒平瓦6721Ga型式（Ⅱ-2期）出土。

Ⅴ 期

SB18936 桁行14間以上、梁行2間の南北棟建物。第401次調査で南端を検出していた。調査区の北に延びる。柱間寸法は3m（10尺）。北半部で床束を7箇所確認でき、少なくとも北半部は床張りであった。床束穴には根石があり、礎石は抜かれている。南半部の柱穴間にある2列の小穴列は足場穴列と考えられる。柱穴掘形の一つに瓦が敷いてある。掘形の瓦敷と抜取穴の両方から軒丸瓦6144A型式（Ⅳ-2期、瓦磚類の項参照）、掘形の瓦敷から軒丸瓦6151A型式（Ⅳ-2期）、軒平瓦6691A型式（Ⅱ-2期）出土。床束穴より軒平瓦6721型式（奈良時代中頃）出土。

なお、本建物の柱抜取穴から凝灰岩切石が3点出土した。一点は残存部分で一辺約48cm、他辺は原形をとどめており約48cm、厚さ約15cmである。側面には幅2cm内外のノミ切り痕がある。原形をとどめる辺の縁辺部には10cm幅で深さ1cm程度の平坦面が施されており、この部分が地覆石との合口になると考えると、延石か羽目石と考えられる。次の一点は地覆石。幅約17cm、高さ約14cm、長さは約63cmである。幅約3cm、深さ約3cmほどを相欠の仕口としている。仕口のない面には深さ6cmのところまで1cm程度の切り欠きがある。天端を平坦に整形し、控えは荒ノミ切りとして階段状に削り出す。上には羽目石か壁がのるものと思われる。もう一点も地覆石。幅約13cm、高さ約15cm、長さは、片側が割れており現存で約15cm。幅約7cm、深さ約5cmを相欠の仕口としている。ただし、これら3点はお互いに組み合うものではない。

SB19116 SB18916と柱筋をそろえる南北7間の建物。東方は調査区外に至る。柱間寸法は3m（10尺）。穴の一つから柱根（ヒノキ）出土（樹種鑑定は年代学研究室の大河内隆之による）。柱痕跡を含めて柱直径は約30cm。

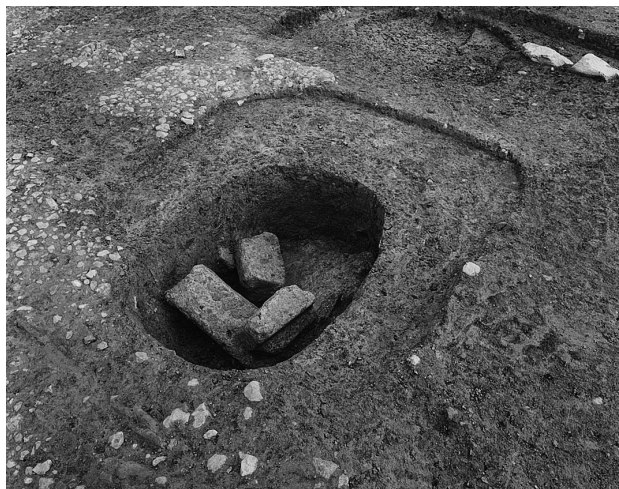


図166 SB18936柱抜取穴出土の凝灰岩切石検出状況（南西から）

SK19119 SB18936とSB18916の間にある東西3m、南北14mの南北に長い土坑。緑釉磚、凝灰岩、軒瓦が多い特徴をもつ。軒丸瓦6311A型式(Ⅱ-1期)・6151Ab型式(Ⅳ-2期)、軒平瓦6664D型式(Ⅱ-1期)出土。

SK19120 SK19119の北にある円形土坑で直径約2.4m。SK19119と同じく緑釉磚、凝灰岩、軒瓦が多い。軒丸瓦6151A型式(Ⅳ-2期)、軒平瓦6721D(Ⅲ-1期)・6732C(Ⅳ-1期)・6760A(Ⅳ-2期)型式出土。

その他の遺構

SA19117 調査区北西部で5間分検出した。柱間寸法は約30cm(10尺)。調査区より北に延びる。

SK19121 調査区東北隅で検出した土坑で、東西40cm、南北50cm、深さ約20cm。穴の中位に緞銭を置き、その上に2枚の灯明皿を正位に置く、地鎮具の可能性がある。肉眼観察によると銭は銅銭で119枚あり、これまでに銭文が判明したものは和同開珎のみである。Ⅳ期のSB19115の柱穴掘形よりも新しいことが確認できる。

SB18916 調査区南東隅で検出した梁行2間の南北棟建物で、第401次調査を含めて南北15間(45m)分を検出した。今回北端を確認し、なお南に続く。柱間寸法は約3m(10尺)。柱抜取穴の一つから二彩の鉢小片出土。Ⅱ期のSB19102や石組溝SD19103よりも新しい。第421次調査区でもこの建物を検出している。参照されたい(131頁)。

SD19122 調査区東中央部で検出した南北方向の石組溝。側石・底石が残る。底に幅約20cmの石が一行並ぶ。東から流れ南に曲がる。Ⅲ期のSC19113よりも古い。

SD19123 調査区西中央部の斜行溝。幅約60cm。Ⅲ期の

SC19112よりも古い。

SD19124 調査区西南部の東西溝。幅約80cm。

SD18926 調査区南東部で約3m検出した。第401次調査の再検出。東から西に流れる。底石が残るのみで側石は抜き取られている。一辺30~40cmの石を一行並べており、片麻岩、花崗岩を主体とする。東にあるⅡ期のSD19105の底石より2~5cm高い位置に底石があり、Ⅱ期のものとは考えにくい。SB19114の南雨落溝の可能性もある。

SD19126 調査区南東隅で検出した、幅約70cmの礫を入れた南北方向の溝。SD18906の東端に沿っている。第401次調査区に続く。

これらの遺構の他に、調査区東南端でⅡ期のSB19102よりも古い柱穴列を検出している。(浅野啓介)

出土遺物

土器・土製品 土器は奈良時代の土師器・須恵器を中心に整理箱約40箱分がある。その7割ほどが黄褐色土などの包含層出土の土器で、遺構出土土器も各々少量ずつである。施釉陶器には南北棟建物SB18916(その他の遺構の項参照)柱抜取穴出土の二彩の鉢小片と床土出土の灰釉陶器碗片があるだけで、ほかに床土など出土の青磁碗、近世陶磁器類がある。なお、包含層、整地土などには古墳時代~7世紀中頃の土師器、須恵器および5世紀前半~6世紀代の円筒埴輪、形象埴輪(盾・家・蓋形など)が含まれている。遺構出土土器では、石組溝SD19103・19104などの側石・底石抜取穴や礫敷・石組溝を壊す土坑から出土した土師器杯A、大型把手付有孔蓋、須恵器杯、皿類が、石組溝埋土出土の須恵器杯Bなどとともに奈良時代中頃のものに限定されていることはⅡ期の石組溝の廃絶時期を示す遺物として注目される。なお、Ⅳ期の建物SB19115の柱掘形を壊す位置に掘られた土坑SK19121に収められた銅銭(和同開珎)の上に正位に置かれた2点の土師器は直径18.0cm内外、器高2.3~2.6cmの皿AⅡである。口縁部の一部に灯明痕跡が確認されるものの、風化が著しく土器表面の観察が困難であるが、内面の暗文は無いとみられ、形状から奈良時代中頃と推定されるにとどまる。(西口壽生)



図167 SK19121の検出状況(西から)

瓦磚類 第423次調査で出土した瓦磚類の一覧を表21にまとめた。このうち、比較的状态の良い軒瓦の拓本を図168に掲げた。第421次調査と同様、軒瓦の出土点数はそれほど多くないものの、その大半が養老5年～天平17年に製作されている点は指摘できる。

一方、「東院玉殿」所用と考えられる軒丸瓦6151Aが比較的多く出土している点は興味深い。少数ながら、それと組み合う軒平瓦6760Aも出土している。ただし、緑釉のかかった個体は確認されておらず、建物によって無釉の軒瓦のセットを用いていたのであろう。

また、6144Aが3点出土しているが、この型式は平城宮の中でも東院地区に限られた分布を示す。『学報XⅢ』ではこの瓦の時期をⅣ-1期(757～767)と想定しているが、これまでに組み合う軒平瓦が確認できないこと、その直径が6151Aに酷似していること、今回検出されたSB18936の柱掘形の底から6151Aと共に出土していることなどから、この6144Aの性格を6151Aの補足瓦として想定し、その時期も6151Aと同じくⅣ-2期(767～770)に

表21 第423次調査 出土瓦磚類集計表

軒 丸 瓦			軒 平 瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6132	A	3	6663	A	2
6135	A	1		?	1
6144	A	3	6664	D	1
6151	A	8	6681	B	1
	B	1	6682	A	2
6225	A	3	6691	A	2
	?	1	6721	D	1
6282	Ca	1		Ga	4
	G	4		?	4
	H	1	6732	C	2
	I	1	6760	A	2
	?	2	型式不明 (奈良)		2
6284	E	2	型式不明		3
6291	A	1			
6308	A	3			
	B	2			
6311	A	4			
	B	3			
6313	A	1			
型式不明 (奈良)		3			
型式不明		10			
軒 丸 瓦 計		58	軒 平 瓦 計		23
丸 瓦		平 瓦	磚		凝灰岩
重量	142.24kg	442.75kg	27.84kg	56.62kg	
点数	1314	5800	82	575	

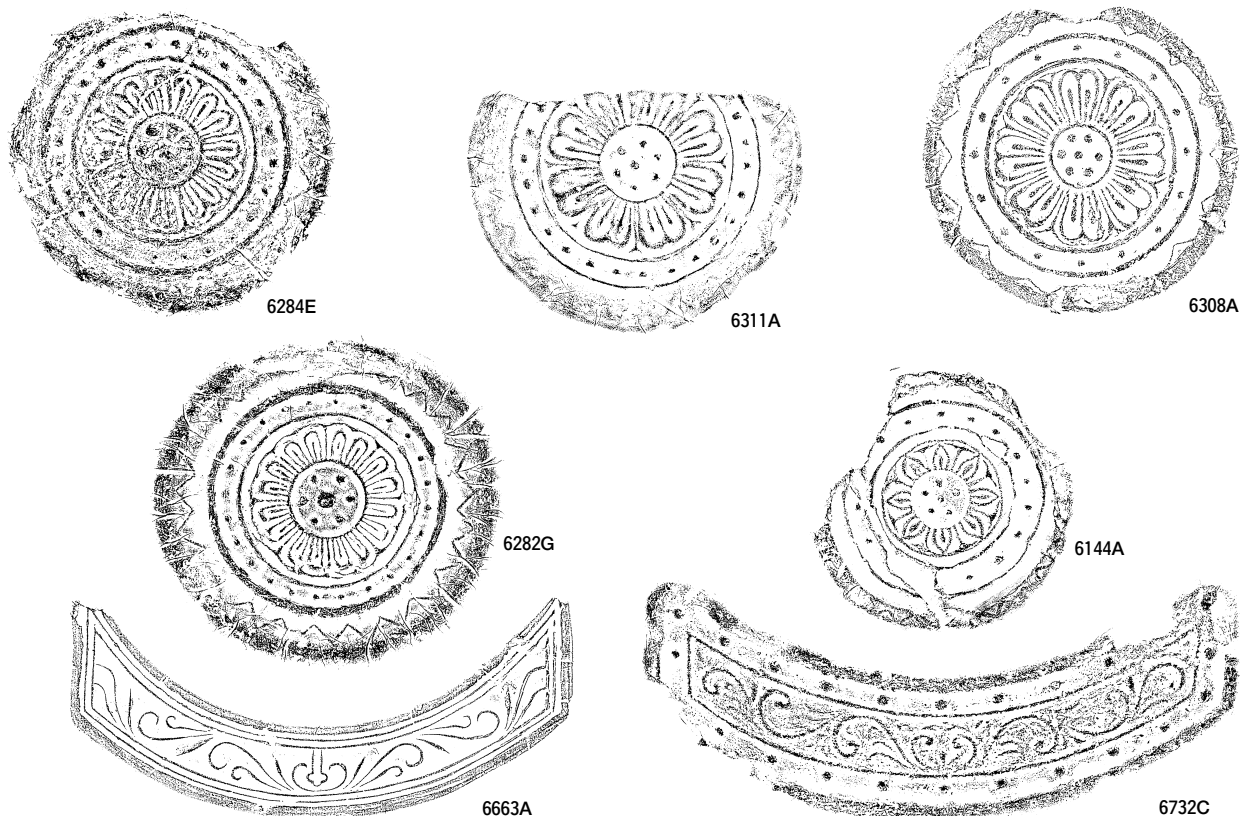


図168 第423次調査出土軒瓦 1:4

降るものと考えたい。

なお、緑釉磚がSK19119・19120を中心に18点出土している。
(林 正憲)

5 遺構変遷

隣接する調査区を視野に入れながら、東院地区の遺構の変遷を考えてみたい(図169)。

I 期 床張りの両面廂建物SB17840があり、東にSA19055、西にSA17802が配置される。また、SA19055とその東にあるSA19025の間は幅18mの南北通路が推定され、東院を3つ以上の区画に分割していることが分かる。その他に、南北棟総柱建物SB18756や中規模の建物が並ぶ。奈良時代前半に比定される。

II 期 SB19100の南北にSB19101・19102を配置する。このSB19100・19101・19102は調査区の東側に延びる大規模総柱建物群になる可能性がある。これらの南には柱筋をそろえて四面廂建物SB17805がある。また石組溝の整備と、礫による舗装がおこなわれており、東院地区が整備された時期といえる。さらにこれらの東側では、造営方位が西で北に振れる建物群が存在する。およそ平城遷都(天平17年、745)頃に比定される。

III 期 四面廂建物SB19080があり、その西北にSB19114が配置される。それらの建物を回廊SC19112・19113が囲む。この時期でも建物外には礫が敷かれていた。この回廊の西側には、SC19113と柱筋の合う総柱建物SB18760がある。この時すでに石組溝は機能を停止していた。この時期から廊状の区画施設が現れるようになる。

IV 期 III期の回廊よりも東側に、東院の重要施設を囲む回廊SC19050がある。その西には、空閑地を挟んで大規模な総柱建物群(SB18770・17800・17810)が南北に連なる。

V 期 第243次調査で検出した東院南門(SB16000C)を通る東院中軸線上に北廂付き東西棟建物SB19090があり、その前には目隠堀SA19045がある。これらの背後には大規模建物になる可能性があるSB19116が配置される。以

上の建物群の西には南北に長い廊状の建物(SB18935・18936)が並ぶ。さらにその西には南北堀(SA17817・17818)がある。一部その堀があいた箇所は幅約10mの通路であると考えられ、第128次調査で検出した築地堀SA5760にとりついた門SB9606に通じる。奈良時代末期に比定される。
(浅野)

6 まとめ

東院におけるこれまでの調査と同様に、5時期の変遷を確認した。とりわけ奈良時代後半には、短期間のうちに数度の全面的改作をおこなっている。

第421次調査 第421次調査の成果は、既調査区の成果を踏まえ、東院の区画変遷をほぼ解明できたことである。その概略は、西半部に官衙的な建物を配し東院を少なくとも東西に二分して利用していた段階(I期：奈良時代前半)から、東院全体を広く区画する段階(II期以降)への変化と理解でき、その延長に、奈良時代末期(V期)にみられる東院南門(建部門)の中軸線を意識したより計画的な建物配置を位置づけることができる。また、奈良時代後半(IV期)に属する単廊形式の回廊(SC19050)を検出した点は特筆される。東院の中枢部を第421次調査区の北東に推定する説は、これによりさらに確実になった。

(山本)

第423次調査 今回の調査で、東院地区中枢部には大規模な総柱建物や石組溝が多いという特徴を確認できた。この特徴は、建物外を礫敷で舗装することとあわせて、内裏をはじめとした宮殿の様相に類似する。建物配置だけでなく、舗装や排水施設など生活空間全般を検討する上での足がかりを得たといえよう。また、V期の建物の柱抜取穴から地覆石が出土しており、当該期に基壇建物があったことを示唆する。さらに、II期の建物SB19100・19101、III期の回廊SC19113およびV期の建物SB19116が東に続く可能性があり、各時期にわたって本調査区の一、二段高い東側に東院中枢部の主要施設があることが推定される。
(浅野)

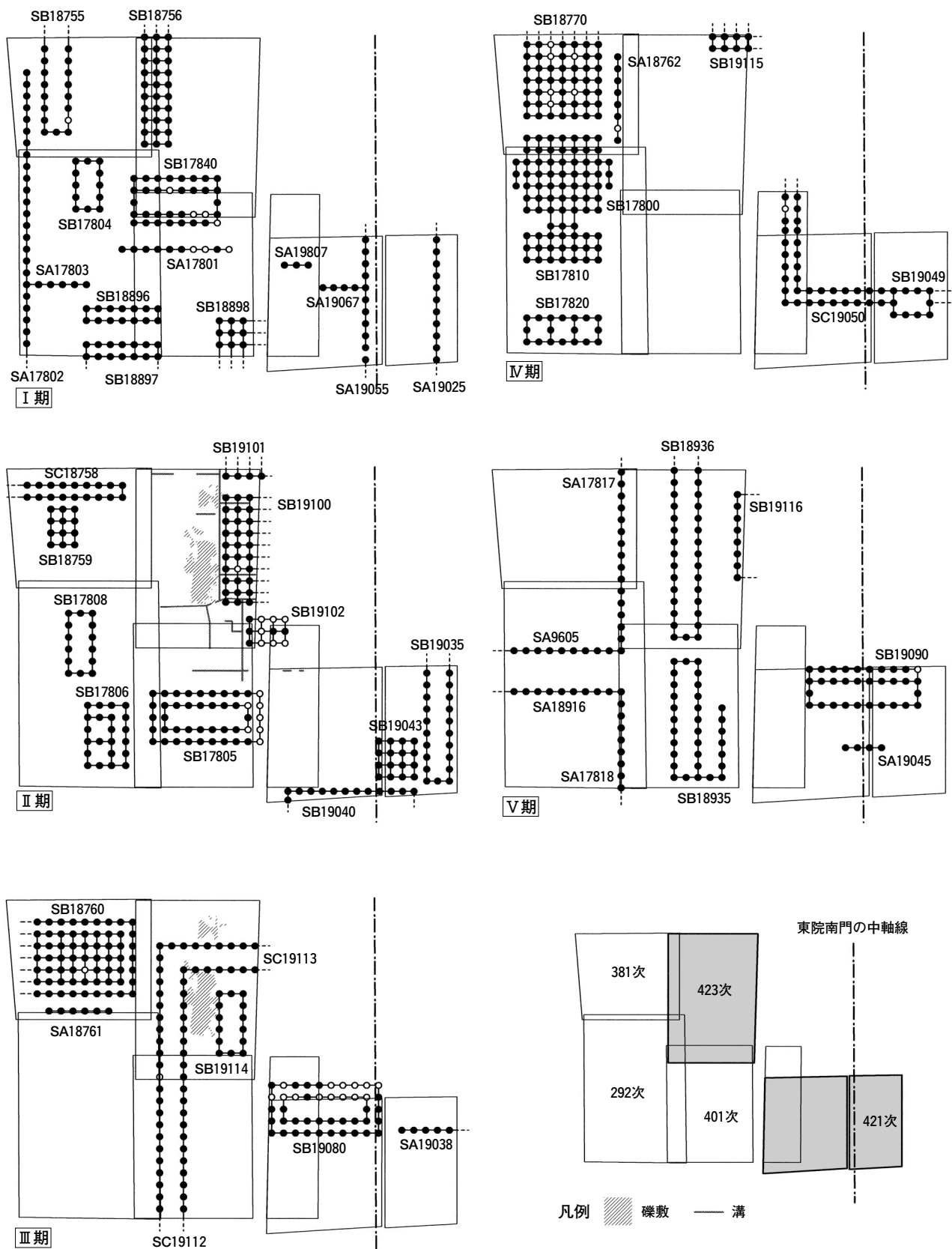


図169 東院地区遺構変遷図